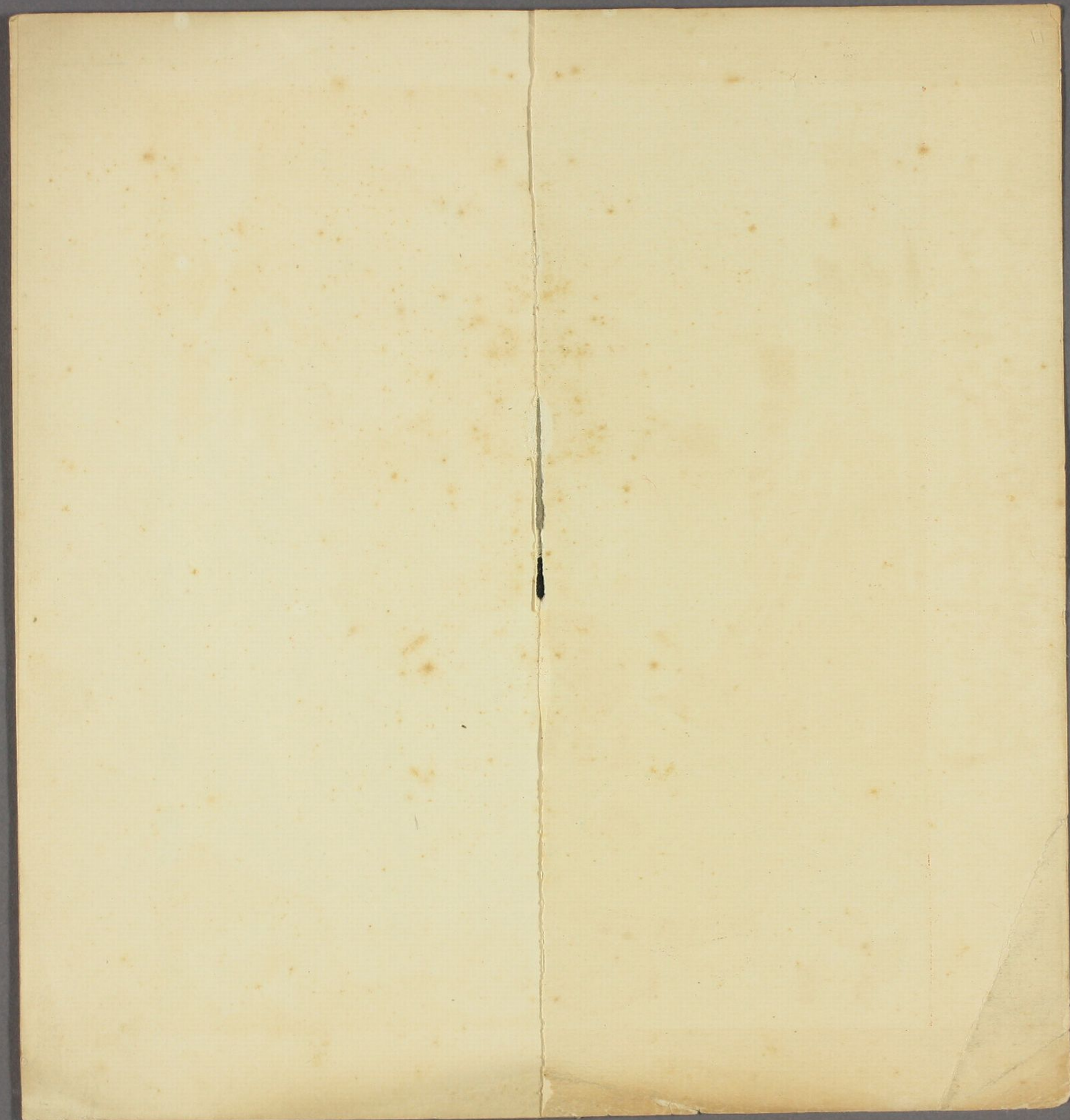


大久保綱浦改選

詩經新體詩選



文學會



詩經新體詩選

大久保綱浦改選

詩經

國風一 周南一之一

關雎三章

關關雎鳩。在河之洲。窈窕淑女。君子好逑。 ●參差荇菜。左

(一) 周南關雎三章

右流之。窈窕淑女。寤寐求之。求之不得。寤寐思服。悠哉悠哉。輾轉反側。●參差荇菜。左右采之。窈窕淑女。琴瑟友之。參差荇菜。左右芼之。窈窕淑女。鐘鼓樂之。

一、 呼ひつ呼はれてつれぶしに

鳴くや小島のみさご鳥

雌雄たゞしくむつまじく

遊ぶ風情を見るにつけ

二、 あのをたをやかな乙女にて

賢き徳の在しまする

大姒妃こそ文王の

善好よつれあひ迷よにありつるよ
好き 伉儷

三、 川に遊ひてながみじか

流れに生へるあさゞ草

左へ右へもとむなる

心の如く后妃には

四、 つねにさがしき女をば

求めて共に内治め

賢人擧て文王の

助けなさんと思ふ故

五、 寤めの時も寐し間も

思ひつゝけて得んものと

心碎きて忘れねば

思ひ沈みてやるせなし

六、 願ふは此の草摘みとりて

芼ほす薦すすめなばさぞや〜

朝な夕なに喜びて
此の草青みに入れもせば
鐘や鼓のそれよりも

琴にもかへて友とせん
さこそ喜びくくして
まして親むことぞかし

葛覃三章

葛之覃兮。施于中谷。維葉萋萋。黃鳥于飛。集于灌木。其鳴喈喈。
● 葛之覃兮。施于中谷。維葉莫莫。是刈是護。爲絺爲綌。服之無斃。
● 言告師氏。言告言歸。薄汚我私。薄澣我衣。害

澣害否。歸寧父母。

一、夏の初めになりもせば
谷の中までつたひ行き
二、時こそよけれと黄鳥は
春も駘蕩の風情にて
三、葛の葉色も莫々と
是を刈りとり湯に入れて

葛のかつらや蔓も覃
葉もうるはしく茂るなり
飛ひ来るなり灌木
聲和かに鳴き渡る
しげれる頃になりぬれば
澣たて績て布となし

四、 締ほそきも給あづかりもそれくくに
 乙女の時より妻たるの
 衣裳となして教いはすは
 女の職を習ふなり
 五、 女は一たび歸かへぎては
 乙女の時より妻たるの
 みだりに父母歸省かへりこと
 諸侯の娘はせひなくも
 六、 師おし氏の姆うばのゆるし得て
 師氏の姆のゆるし得て
 もしも我家へ歸りなば
 七、 新衣あら常服つねの差別なく
 新衣常服の差別なく
 よごれを澣きよめ洗あらひなし
 身に行ひて忘れずに

常は洗ひし衣ころも着て

父母を歸寧かへりは孝心よ

卷耳四章 (全)

采采卷耳。不盈頃筐。嗟我懷人。寘彼周行。 ● 陟彼崔嵬。我
 馬虺隤。我姑酌彼金罍。維以不永懷。 ● 陟彼高岡。我馬玄
 黃。我姑酌彼兕觥。維以不永傷。 ● 陟彼祖矣。我馬瘠矣。我
 僕痡矣。云何吁矣。

一、 后妃の心常日頃 王のお爲めに賢臣を

見出し得れば周の世の
 心を惱ましませば
 をなもみ草を摘みとれど
 彼の遠國に行きたまひ
 大夫の馬もつかれ果て
 もしもかくなる難義をば
 苦を慰むる一獻の

盛りを添ゆることなりと
 春の彌生の野に出で、
 僅かの筐にも盈たざりき
 嶮岨の山を陟ゆるとき
 倒るゝ苦しみ如何ならん
 なされ玉ひしその折は
 酒をも召され玉ふなら

少しは苦勞も忘るれど
 御性質にましませば
 彼の高山の銳きを
 黄色となりて苦しむに
 角にて飾り付けられし
 心を慰めたまひなば
 彼の石山を陟ゆるとき

酒や遊ひを禁められし
 殊更心の傷まるゝ
 陟ゆれば黒き馬さへも
 かゝる難義の其の時は
 盃とりて酒をくみ
 斯くは心を傷めまじ
 馬も難所に瘡れ果て

馬引く僕も痛るらん
胸に溜りし憂さつらさ
何れを何れと分けかぬる

これを思へば思ふほど
口さへ出でず我身にも
げにも吁しき哀みよ

繆木三章

南有繆木。葛藟纍之。樂只君子。福履綏之。
藟荒之樂只君子。福履將之。
君子。福履成之。

一、南の方に古木あり 茂る枝葉に葛や藟
まとまり纍る如くにて 下萬民は文王の
二、恵みになつきて育つなり されは君子の幸ひは
千代萬代の末までも めでたく盛ゆ樂しみの
三、言葉に盡きぬことならぬ 南の方に古木あり
纏ひつきたる葛や藟 次第に枝葉も茂り來て
四、終にその木を荒ふ如く 君子の徳はひろがりき

五、南の方に古木あり
蔓も次第に延びければ
縈るが如く文王と

終にその木にからまりて
太姒妃との福徳を
末の末までいやさかへ
大業成就なしたまふ

蠡斯三章

蠡斯羽。洗洗兮。宜爾子孫振振兮。 ● 蠡斯羽。薨薨兮。宜爾

子孫繩繩兮。 ● 蠡斯羽。損損兮。宜爾子孫蟄蟄兮。

一、いなごは一度九十九の
幾萬となく數知れず
二、子々孫々のさかゆるは
いなごの飛ぶや薨々と
三、子々孫々の絶えざるは
いなごの飛ぶやあつまりて

子をうみ中も睦ましく
羽ばたきなして飛ぶ如く
げにさかんなることならめ
むらがり集り數多く
げにつながれる繩なるか
中むつましきそのさまは

四、子々孫々の和かに

されば妻たり妾たらば

五、嫉妬の心なきやうに

多くさかへし文王の

おびたゞしきが如くなり

いなごに劣らぬ心して

中よく睦みて子や孫の

后妃大姒を鑑みよ

桃夭三章

桃之夭夭。灼灼其華。之子于歸。宜其室家。 ●桃之夭夭。有
蕢其實。之子于歸。宜其家室。 ●桃之夭夭。其葉蓁蓁。之子

于歸。宜其家人。

一、春も半ばになりぬれば

二、花咲き亂れ夭はしく

三、頃しもよけれ昏禮の

花にもましてうるはしく

四、家内内外睦しく

早や夭しき花落ちて

桃の若木は伸びくゝて

灼り照して山を焼く

式を行ふその姿

夫の家に在るときは

宜しくととのへ治めかし

盛んに實をは結びしは

四、徳の至るに喩ふべし
盛んに茂れるそのさまは

若葉の日々に美しく
行ひよきに喩ふなり

兔置三章

肅肅兔置。椽之丁丁。赳赳武夫。公侯干城。
于中逵。赳赳武夫。公侯好仇。
武夫。公侯腹心。

一、殷の暴逆厭ひてや

賢者は逃れて山中の

三、獵師と身をばやつしつゝ
置張る椽木打とむる
姿もいと、肅めり
三、文王天下取りたまひ
中にも呂尙や散宜生
四、敵を防ぎて天暗れの
あちらこちらも行ふなる

姦智の兔をとらへんと
音さへ高く丁々と
今はや聖の御代となり
たけき武夫用らる
王を助けてうしるだて
功名てがら立てたりき
道の傍へに置を張る

五、その有様や肅めり
 上に置れて文王の
 六、林の中は奥深く
 置張りければ静まりて
 七、主従となりて頼もしく
 君の爲めには腹心の

さすればたけき武夫は
 好き一對の君臣よ
 見る事さへもならざるに
 たけき武夫出て來り
 機密のことまで明すなる
 よき臣下とはなりにけり

芣苢三章

采采芣苢。薄言采之。采采芣苢。薄言有之。 ●采采芣苢。薄言掇之。采采芣苢。薄言撝之。 ●采采芣苢。薄言袺之。采采芣苢。薄言負之。

一、野邊の遊びて打むれて
 芣苢草を摘み取るは
 二、むかし宮女の孕むとき

あちらこちらと歩みつゝ
 子寶多く持んため
 席の上に戯れて

氣血めぐらすよしを聞く

いま野にあそび此の草を

三、取るは子孫の生育を

楽しむ故にありつるよ

さればこれをば采りひろひ

筐に満たせて落ぬれば

四、掇ひ片手に穂をおさへ

片手に實をは掬りみて、

結むすや襪はきにもはさみ入れ

我か家をさして歸るなり

漢廣三章

南有喬木不可休息。漢有游女不可求。思漢之廣矣不可泳。

思。江之永矣不可方思。 ● 翹翹錯薪言刈其楚之子于歸。

言秣其馬漢之廣矣不可泳思。江之永矣不可方思。 ● 翹

翹錯薪言刈其藁之子于歸言秣其駒漢之廣矣不可泳思。

江之永矣不可方思。

一、南に高き木のありて その枝や葉は上に向き

垂れたることのあらざれば 雨風暑さもよけること

二、ならざるのみか休むさへ ならぬといへる氣高さは

三、 さがしき潔き貞女の
漢水あたりも殷の代は
貴嬢^{ひすめ}なども花や月
四、 手をとりに杖を曳くときく
聖徳四方^よに行きとゞき
五、 卑しき賤の遊女も
禮なく契るものもなし

諭へを引ける言の葉か
風俗あしく公卿^{きやうけい}方の
そゞろ歩きに戀人と
今文王の御代となり
風俗よろしくなりければ
操正しくなりゆきて
あの漢水は美しく

六、 廣き川ゆへ泳りても
あせれどならぬ言の葉は
潔らかなるに喩へける
二つの舟を並ぶとも
八、 いふ言の葉も同じこと
連添ふことのならざるを
九、 薪とすべき木々の中

向の岸へ渡らんと
女の操正しきと
あの漢水は長ければ
とても渡るに甲斐なしと
婦女の操の清ければ
喩へてよみし歌こゝろ
高く目立て秀てたる

生長しやすき牡荆の
 十、漢水ほとりあるくなる
 薪とすべきもの多き
 十一、すぐれしものを娶らん
 若しも我家へ嫁りて
 十二、古禮にかんがみ親迎の
 馬に秣まきをかひ終て

木をとり薪となさんとは
 女は行ひきよくして
 中にていとも行ひの
 歌の意こころにありつるよ
 くるゝをいなみたまはずば
 禮とりなして自からは
 すぐに迎ひに行くぞかし

十三、あの漢水は美しく
 向ふの岸へ渡り得ず
 十四、二つの舟を並ぶとも
 薪となるべき草の中
 十五、あの萑刈わららんとは
 行ひけだかき尤物を
 十六、もしも此方へ媒りて

廣き川ゆへ泳りても
 あの漢水は長ければ
 とても渡るに甲斐もなし
 高く目立て秀てたる
 女の多きその中に
 娶らん歌の意こころかや
 くるゝをいなみたまはずば

古禮に則り親迎の
十七、小馬に秣をかひ終へて
あの漢水は美しく
十八、向ふの岸へ渡り得ず
二つの舟を並ぶとも

禮とりなして自からは
すくに迎ひに行くなるぞ
廣き川ゆへ泳りても
あの漢水は長ければ
とても渡るに甲斐もなし

汝墳三章

遵彼汝墳。伐其條枚。未見君子。惄如調飢。 ● 遵彼汝墳。伐

其條肄。既見君子。不我遐棄。 ● 如燬。父母孔邇。

● 魴魚鱓。尾王室如燬。雖則

一、大夫の役目かふむりて
汝水といへる川墳
二、條まや小木の枚まを切る
早く歸りを待つなれど
三、されど妾はいつの日か

南の果てのかたほとり
したがひ行きて大木の
卑しき勤めをなし終て
何の便りもあらざりき
夫おとこに逢はれぬことなしと

四、 怨言をいはず一筋に
 食事をいそぐ如くなり
 五、 随ひ行きて大木の
 今年になりて切る如く
 六、 別ちてよりは二年の
 妾をいとひ見棄ずに

公事を重んじて
 夫を思ふは朝うゑて
 去る年汝水の川墳
 條切り口の肄を
 一度涙に袖をば
 月日を越て歸る今日
 愛でらる心の嬉しさよ

七、 流れ早きを遡る
 苦しむ故に尾より血の
 八、 此の亂世に生れ來て
 顔色さへもやせほそり
 九、 紂王暴逆無道にて
 過ちにてもあるならば
 手ひどき罪を得るのみか

魴魚すら骨折りて
 出づるか如く夫には
 つらき役目を西東
 時も時とて王室は
 もしも萬一我夫に
 火にも燬かるゝ苦しみの
 戀しなつかし父母の

身にも及ぼす心して

それを恐れて慎めり

麟之趾三章

麟之趾。振振公子。于嗟麟兮。

●麟之定。振振公姓。于嗟麟兮。

一、獸の中の麒麟こそ

仁愛深く生草も

趾にて踏まぬ心あり

太平の世に出づと聞く

二、今文王の公子達の

生れながらに盛んなる

才徳威儀の備はるは

げに太平の麒麟なり

三、獸の中の麒麟こそ

定に侵す勇あれど

妄りにつかはぬ心あり

太平の世に出づと聞く

四、今文王の子や孫は

生れながらに才徳の

自然にすぐれ在しますは

げに太平の麒麟なり

五、獸の中の麒麟こそ

角にて侵す勇あれど

妄りに見せぬ心あり

太平の世に出づときく

六 今文王の一族は
揃ひてすぐれ在しますは
皆な聖徳の備りて
げに太平の麒麟なり

明治三十六年一月十五日印刷
 明治三十六年一月十七日發行

著作 發行 印刷 發行
 者 者 者 者

東京市神田區錦町一丁目十番地 大久保源次郎
 東京市京橋區本湊町十三番地 月三番地 隆
 東京市京橋區本湊町十三番地 松三番地 治
 東京市京橋區本湊町十三番地 松三番地 治
 東京市神田區錦町一丁目十番地 電話本局千〇九三番 所

發行所 東京市神田區錦町一丁目十番地 電話本局千〇九三番 所

元 大阪市江戶堀南通
 廣島市西横町

正價金拾錢

最近刊書目

- | | | |
|------------|---------|-----------------|
| 久松
翫堂著 | ◎社會學と哲學 | 正價金六十錢
郵税金十錢 |
| 隆月著 | ◎吾家の憲法 | 正價金廿五錢
郵税金四錢 |
| 隆月著 | ◎人生の審美 | 正價金廿五錢
郵税金四錢 |
| 隆月著 | ◎文學の審美 | 正價金廿五錢
郵税金四錢 |
| 隆月著 | ◎自然界の審美 | 正價金廿五錢
郵税金四錢 |
| 峨川上著 | ◎婦人の情力 | 正價金三十錢
郵税金六錢 |
| 峨川上著 | ◎戀愛の文豪 | 正價金三十錢
郵税金六錢 |
| 澁來著 | ◎弱者の臨終 | 正價金三十錢
郵税金四錢 |
| 大月著 | ◎英雄の片影 | 正價金二十錢
郵税金四錢 |
| 徳軒著 | ◎名流の家憲 | 正價金三十錢
郵税金六錢 |
| 山口編 | ◎心識活談 | 正價金三十錢
郵税金六錢 |
| 大久保
網浦選 | ◎詩經新體詩選 | 正價金二十錢
郵税金二錢 |
| 大久保
網浦選 | ◎改選新體詩 | 正價金二十錢
郵税金二錢 |

東京神田區錦町(電本一〇九三番)

文學同志會